

木の言い分 ⑥

■庭木とのつきあい(体験)

街路樹も庭木も、人間と自然界とのつなぎ役です。一方から見れば人間の目的を果たすべき役割を持ち、他方から見れば自然界の一員として生きており、他の生き物と同様に、我々の目に瞬間的には見えませんが、絶えず変化しています。だから放置しておけば、周囲の自然に取り込まれるか、負けて消えてゆくかのどちらかです。維持管理の難しさは、この接点と変化をどうとらえて対処するか、という問題に他なりません。去年の2月、私はある会社の本社ビル新築に伴い、そのオーナー会長より屋上に庭園を造りたいとの依頼を受け、これを施工しました。以後、維持管理の一端をになっております。このささやかな体験を少々記してみます。このビルは、大阪市内の中心部にある6階建ての事務所兼マンションです。屋上の約200㎡に庭を造ることになりました。オーナーの要望は、①タマリユウを庭全面に植え込む②黒松等で三保の松原風の広々とした庭を造りたい——などでした。また屋上という条件ですから、重量(土を含めて)・気象条件・散水・排水問題などを十分に考慮しなければなりませんでした。(水関係の問題は、建築時に解決されていました)

【施工時の問題点とその解決策】

●軽量土に松が育つか(?)の不安

松の根鉢の周囲に真砂土を入れ約30cmの厚さで根鉢全体を包み込み、さらにその外側を軽量土・腐葉土・真砂土の混合土で囲み、できるだけ普通植えに近い土質にしました。

●強風時に軽量土が根鉢を押さえる重石になるのか

12mmの鉄筋を15cm間隔の格子状に溶接し、縦横1.5メートルの網状のものをつくり、これを根鉢の下に敷き、腐りのこないナイロン製の帯状ロープで鉢全体を押さえつけるように四方から引っ張り、下に敷いた鉄筋格子に結びつけました。この結果、冬や夏の強風にも耐え、現在は安定しています。(場所柄支柱は使っていません)

【維持監理上の問題点と対応策】

●2月の最寒気に植えたタマリユウは、4月頃から葉先が枯れ出し、十分な散水や施肥でも止まりませんでした。種々試行しましたが、8月初旬にアカマツの皮のチップを厚さ2cm程度全面に敷き込みました。すると目に見えて根張りも進み、葉枯れも消えてきました。11月時点では青々と茂り、立派に育っています。このチップを入れたのが乾燥防止と根粒菌の促進につながったと考えています。

当然のことながら、植物は人間のような意思表示の手段を持っていません。しかし「生き続けたい」という意志は大いにあります。案外(?)、我々人間の愛情や気持ちが理解できる第六感(?)を持っているのではないのでしょうか。いや、そう思ってつき合うのが自然じゃないのでしょうか。